



AI社会でこそ 豊かな言葉が基盤となる

日本教育カウンセラー協会 理事 藤川 章

私は2つの中学校で校長を務めた後に定年退職し、現在、カウンセリング研修の講師として全国を回っています。研修でいつもお話しするのは、「よい言葉がよい人間関係を育む」ということです。生徒と教員、生徒同士、保護者と教員など、どのような立場の人間同士であっても、両者の関係は、言葉を始めとするコミュニケーションがあって構築されるものだからです。肯定的な言葉は相手を元気にして次のコミュニケーションを生みますし、否定的であれば相手を傷つけ、相手に心を閉ざされてしまいます。

ここ数年、AI（人工知能）の発達によって「消える」職業のことがよく話題に上ります。「消えない」職業を見ると、人の心に寄り添う仕事が多く、人を支えるのは人だと改めて感じます。しかし今は、少子化や地域力の低下といった構造変化の影響もあり、社会性が十分に発達せず、その未熟さに起因する問題行動が多発しています。AI社会となるからこそよい人間関係を築くコミュニケーションが重要であり、その基盤を成す言葉を豊かに育みたいと思うのです。

私が言葉の大切さを実感したのは、地域の中でも指導が困難だった初任の中学校での経験があります。生徒指導に明け暮れる中で、指導が難しい生徒の家庭状況が見えてく

ると、将来に希望を抱けない生徒の心の内が理解できるようになりました。その心情に共感した私は、まず生徒の心に寄り添い、彼らの言葉に耳を傾けた上で、自分の思いを伝えるようにしました。カウンセリングでいう、ワネス、ウイネス、アイネス*です。「△△はダメだ」と否定するのではなく、「私は△△について〇〇と思う。きみはどう思う？」と自己開示してから生徒の考えを聞くなど、言葉の使い方に配慮すると、私の言葉が生徒に届くようになりました。

以来、私は生徒により言葉を育むことを意識するようになりました。例えば、事前に用意した50の褒め言葉の中から相手に合う言葉を5つ選び、グループ内で共有する活動を取り入れたところ、相手を好意的に見る視点が育まれ、互いのよさを認め合う関係を築ききっかけになりました。

今後は、かつてのような身体的な暴力よりも、ネットなど見えにくい世界での言葉の暴力がさらに増えていくかもしれません。自分にも相手にも肯定的な感情を持てるような言葉を育む教育が、言葉の暴力を抑え、いじめの抑止にもつながっていくのではないのでしょうか。

*カウンセリング技法の1つである「One-ness」「We-ness」「I-ness」のこと。相手の気持ちに寄り添い、その上で自己開示や自己主張をすることが大切とされる。

ふじかわ・あきら

民間企業勤務を経て、東京都公立中学校教諭に。並行して、東京都教育研究所(当時)の研修生として筑波大学大学院で國分康孝教授から、育てるカウンセリングや構成的グループ・エンカウンターを学ぶ。2010年、日本カウンセリング学会記念賞受賞。2校の中学校校長を歴任。

NEXT>>>

会津大学 文化研究センター長
荻間澤 勇人 教授